

その約束は15年前に遡る。

1983年9月6日、「かしぶち哲郎 featuring 矢野顕子 with ムーンライダーズ」と称するライブが渋谷公会堂で行われた。ムーンライダーズの面々に、ドラムスの鈴木さえこさんと、コーラスの大貫妙子さんとが加わる華やかなステージにあって、かしぶちさんは淡々と、溜息をつくように歌う。

「リラのホテル」、「春の庭」、「紡ぎ唄」ひばり児童合唱団を迎えての「砂丘」、「バックシート」、「狂ったバカンス」が一息に演奏される。続いて「気球と通信」のアコースティック・アレンジ、「オールドレディ」、「O・K、パ・ド・ドゥ」のバロック・アレンジ。いずれもがインストで演奏される。インストというのは曲そのものの美しさを再確認するのに有効だけれど、これらの曲に限っては意表を突くアレンジに驚くばかりである。

後半にアッコちゃんが登場し、「屋根裏の二匹のねずみ」、「冬のバラ」、「堕ちた恋」、「バーレスク」、「恋ざんげ」、「Friends」を。テンポがかなり速く、しかも、アルバムに漂うセンチメンタリズムと倦怠感とが排されているのは、さえこさんの硬質なドラムスに拠ると思われる。YMOでは奔放なヴォーカルでもってステージを席卷していたアッコさんが、かしぶちさんを前にしては従順になっているあたりも聴きどころだ。

ゲストとして登場した教授が「リラのホテル」のピアノを弾き、「Listen tome,Now!」の大団円。アンコールの「憂鬱な肉体」、「ひまわり」を終えて、かしぶちさんがアッコちゃんにようやく語りかける。

かしぶちさん「矢野顕子さん、どうもありがとう。」

アッコちゃん「今度はどこでお会いしましょう？」

かしぶちさん「もちろん、この"リラのホテル"で会いましょう。」

あれから15年経って、再びその門を開けることになった"リラのホテル"。ここで約束は果たされる。1998年11月29日、南青山曼荼羅における「かしぶち哲郎 sings"リラのホテル"」。ライブ中盤、「Friends」を独りで思わせぶりに歌った後に、スペシャルゲストのアッコちゃんをステージに招く。

かしぶちさん「忙しい中、来てくれてありがとう。」

アッコちゃん「だって、かしぶち君のためですもの。」

ピアノとギターによる「屋根裏の二匹のねずみ」をスローテンポで。

アッコちゃんの声には15年間も磨き続けたような艶が加わり、かしぶちさんの声には15年間も燻し続けたような渋味を加わり、かつての切ないラブストーリーが、ノスタルジックな童話のように聞こえた。

2人はテーブルを挟んで腰をおろし、アッコちゃんは客席に向かって、かしぶちさんはアッコちゃんに向かって「Dialogue」を。

チェロの低音と、アッコちゃんによるピアノとコーラスを加えての「リラのホテル」。アンコールは15年前と同じ「Listen to me, Now!」を。コーラスの旋律の外し方も、ステージ上での立ち振る舞いも、かしぶちさんを前にした時のかつての従順なアッコちゃんではなかった。けれども、昔の恋人との再会シーンみたく、あるいは、兄と妹の再会シーンみたく、緊張感と、嬉しさと、気ままさと、はしゃぎ出したい気持ちとが、同時に伝わってくる幸福な光景だった。

もう一度、15年前に遡ってみる。

YMO が散開したためにテレビに背を向けた私は、映画館でデビッド・ボウイに出会い、「戦場のメリークリスマス」を聴いた。あの時はまだ「リラのホテル」に出会っていなかったが、たとえ聴いたとしても、今ほどは多くを感じなかったに違いない。ノスタルジーやアンニュイな感情を抱くには、あまりにも中途半端な年齢だったから。

歲月という回廊を歩く中で、ボウイや「戦メリ」は何処かの踊り場に置いてきたけれど、「リラのホテル」はこうして大切に携えているし、いくつかの歌はいまだに掴めずにいて、ずっと先の方で私を待っていてくれるような気がする。

参照ペ ジ

いかにして「ニットキャップマン」はアッコさんにさらわれたか

http://www.age.ne.jp/x/toriumi/k1/k_nit.htm

かしぶち哲郎 トウキョウローズ 06/21/97at 日清パワーステーション

http://www.age.ne.jp/x/toriumi/k1/k_kasi.htm

AN ACOUSTIC EVENING WITH かしぶち哲郎 03/07/98at 下北沢ラ・カーニヤ

http://www.age.ne.jp/x/toriumi/k1/k_la.htm

(終)

HP 掲載に当たりオリジナル原稿より改行位置変更させて頂きました。

(榎の会 KRAFT.WARTZ)